伝統文化の希有な継承者をご紹介あれ！

日本の伝統文化の中で、「絶滅寸前」にあるように思われる職業に携わる人を取材し、当人の仕事ぶり（写真も含め）や生き様等のルポである「職業外伝」を読んだ。

その職業周辺の言葉、物、仕組み、等々にも洒脱で時にユーモアを入れて紹介。更に「コラム」として、その職業の歴史的起源や経緯等も献紹介している。

その取材相手は、飴細工師、俗曲師、銭湯絵師、へび屋、街頭紙芝居師、野州麻紙紙漉人、幇間、彫師、能装飾師、席亭、見世物師、真剣師。

さて、みなさんは、思い出と共にいくつの職業を具体的に知っていますか？

私も詳しく知らなかっただけに、「ホ～、フ～ン、へ～、そうだったの～、凄いっ！」の連続で、特に、銭湯絵師、街頭紙芝居師、見世物師のルポは幼い頃の体験と重なり、どこか次のような郷愁を抱きながら読んだ。

生家の三軒斜め向かいが銭湯だったので、高卒まで利用したが、銭湯の絵は松だった気もするが、はっきり思い出せない。

しかも早い時間の銭湯通いなので常連のおじさんたちと顔馴染みになり、色々話しかけられた。

その銭湯も昨年閉鎖されことを竹馬のメールで知った時、どこか故郷がなくなったような寂しさを感じたもの。

街頭紙芝居は、どうしてだったか忘れたが紙芝居を見るお駄賃を親から貰えず、毎回友だちの後ろからのタダ見だった。でも、紙芝居の親父に、「タダ見するな！」と叱られた記憶はない。良き時代だったのか……。

どうも街頭紙芝居には、後ろめたさをいつも感じていたからか、切ない感情と共に思い出す。

見世物は、毎年八幡様の祭りに来ていた。幼い頃に見た見世物小屋にかかる看板絵の印象が強いのか、今も、怖さ、気味悪さの感情と共に思い出す。

今の時代に、希有となってもこうした職業が存続していることに驚いたし、次第に跡継ぎもなく、すたれて行くのは、やはり自分の幼い頃の「心の足場」がなくなるようで、何ともいい知れない郷愁だけが……。

そうそう、跡継ぎを希望する若者のために、各当人から、「なりたい人へのアドバイス」も短く記載され、連絡先まで紹介されていますよ。

また、著者も、著者自身がまだ気づいていないこうした希有な「職業や人を各地域でご存知でしたら、連絡下さい。」と連絡先も記載されていますよ。

伝統文化の希有な継承者をご紹介あれ！

（2005 年 6 月 15 日　記）